

～突撃★ドメーヌ最新情報！！～

◆VCN°27 ナナ・ヴァン

生産地方：ラングドック

新着ワイン 1 種類♪

VdF ソー・ナット！2016（白）

2016年のナットは、暑い年だったにもかかわらず、前年よりもタイトで輪郭のはっきりとしたワインに仕上げている！ナタリー曰く、今回は収穫が思っていたタイミングよりも若干遅れたため、乳酸チックな味わいに仕上がったが、今回は酸もしっかりと残ったベストなタイミングでブドウを取り入れることができたとのこと！（ちなみに、ナットの収穫日の決定は、糖度計は参考程度で、全てはブドウを試食にかかっているそうだ！）ワインは前回同様にコストパフォーマンスが非常に高く、華やかな香りと南のワインとは思えない絶妙なバランスがあり、つついグラスが進んでしまう～！

VdF エンジョイ！2015（赤）

2015年は、前回の特徴にあったスパイシーさが抑えられ、より飲み口の良いスマートなワインに仕上がっている！「非常に洗練されていて、出来過ぎなくらいだ！」と、ナタリーが自画自賛するほどワインが綺麗にまとまっている！彼女曰く、この見事なバランスは醸造テクニックからではなく、50年を超えるヴィエーユヴィーニュだからこそなせる業だとのこと！しかし個人的には、それ以上にナタリーのセンス、いわばナタリー節が全面に出た結果だと思う。ナット同様に何てコストパフォーマンスの高いワインだろうと、本当に感心してしまう。

ミレジム情報 当主ナタリー・ゴビシェールのコメント

2015年は質にも量にも恵まれた当たり年！春は温暖で適度な雨にも恵まれ、ブドウの成長も1週間ほどペースの速い幸先の良いスタートだった。開花も問題なく順調に終え、ブドウの病気も一切なく豊作が期待された。5月終わりまでブドウの成長に勢いがあったが、6月に入ってから連日夏日が続き、雨も一切降らなくなったため、乾燥により成長に少しブレーキがかかり始めた。日差しの強く乾燥した気候はそのまま8月の中旬まで続き、その間も全く雨が降らなかったため、ブドウの葉は裏返り、房も小さくコンパクトなまま明らかに水不足の様相を呈してきた。だが、幸いにも8月15日、16日と2日間に渡り計50mmのまとまった雨が降ってくれたおかげでブドウは息を吹き返し、そのまま果汁をしっかりと蓄え完熟したきれいなブドウを収穫することができた！

2016年は、収量こそ前年よりも落ちたが、質的には2013年のような当たり年に恵まれた！春は適度に雨が降り、暖かい気候にも恵まれたため幸先の良いスタートが切ることができた。だが5月に入り、開花時に真夏のような猛暑が数日続き、一部早熟系のブドウは花が焼けてしまうような現象が起こった。6月に入っても雨の降らない日が続く一時は日照りが心配されたが、ヴィエーユヴィーニュであるサンソーやテレブランはどうか持ちこたえることができた。7月も雨が降らない日が続く、さすがにブドウも取れ落ちる寸前までバテていたが、8月中旬に奇跡的に50mm程度の雨が降ったおかげで再びブドウも元気を取り戻し、無事収穫までたどり着くことができた！

「ヨシ」のつ・ぶ・や・き



写真① シャベルの区画(霜の被害は少ない)

現在ナタリーは、南と北を行き来する生活を送っている。彼女が南に拠点を移して以来、ロワールにいた時のときのように気軽にアポを取って会いに行くことが難しくなってしまったが、どうぞご心配なく。今回はうまく日程があわなかったため、電話やメールでやりとりしながら、詳しく状況を聞いてみた。

まず4月下旬から終わりにかけて襲った霜の被害について、トゥーレーヌが軒並み7割~8割の被害に遭う中、ドメーヌのあるコート・デュ・ロワールは、今のところ3割ほどの被害で済んでいるとのこと。ナタリー自身は、ドメーヌのピノドニスとシュナンが晩熟で、萌芽が遅かったことが被害を最小限に抑えることにつながったと分析している。しかしながら、シャベルの区画は比較的被害は少なかったものの(写真①)ピノドニスは全体で約50%の霜害にあい、またシャベルの区画から500mも離れていないル・ブリゾーのシュナンはひどく、約80%の霜害にあってしまったそうだ。(写真②)



写真② ル・ブリゾーの区画(霜の被害大)

一方、ナナ・ヴァンのあるラングドックは4月20日と29日に0度まで気温が落ちたが、幸いにも霜でブドウが被害に遭うまで至らなかったとのこと。これを聞いて一安心したが、しかし他の場所では甚大な霜の被害が出ているところもあり、例えばボルドーやラングドック、ルーシオンといった南の産地でも例年では考えられないような被害状況だ。近年一部では温暖化により冬の冷え込みが不足し十分な休眠期間がなく、さらにブドウの生育スピードが早まっていることが霜害の理由とされている。だとすれば今後も産地と品種によっては時として、今年のような甚大な被害が起きてしまう可能性があることは否めない。かつては春を告げるイースターまでの懸念事項であった霜害も、今年は4月16日のイースター後に数回も直撃していることを考えると、今後も毎年気の抜けない春になりそうな、予感がしてならない・・・。

近年ナタリーのように、特に北の生産者は霜や雹、雨のリスクを考え、収量にアドバンテージのある南のブドウをネゴスとして仕込む生産者が増えている。一部でそのやり方に否定的な声もあるが、もはや背に腹は変えられない状況となれば、特に資金的に苦しい立ち上げたばかりの若い生産者については今後ますますネゴスのワインが増加していく傾向が考えられる。ドメーヌを維持するための賢い選択として、世間が理解をしていかざるを得ないだろう。ネゴスであっても、生産者のフィロソフィやアイデンティティがあれば、もはやドメーヌと同じコンセプトのワインであると、考えをあらためて行くべきかもしれないと思う、今日この頃だ。

(2017.5.3のドメーヌ突撃生電話&5.4のメール回答より)